

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 NIE 推進協議会 〒060-8711 札幌市中央区大通東4丁目1 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX011-210-5826

北海道新聞 NIE ホームページ (<https://nie.hokkaido-np.co.jp/>) でバックナンバーを閲覧できます

いっしょに読もう新聞コン

袴田さん(札幌小) 全国優秀賞

気になった新聞記事について家族や友人らと話し合い、考えたことを応募する「第16回いっしょに読もう!新聞コンクール」(日本新聞協会主催)で札幌市立円山小4年の袴田奏衣(かなえ)さんが、最優秀賞に次ぐ優秀賞を受賞した。袴田さんが通う進学塾「円山アカデミー」(札幌市中央区)からは、全国と道内の表彰を合わせ小中学生5人が入賞。袴田さんと円山アカデミーに新聞を使って勉強をする感想や意義を聞いた。

熱中症予防呼びかけ

コンクールは小中高生と高専生を対象で今回は全国で6万1428編、道内から1151編の応募があった。うち小学生は全国で4643編、道内189編。個人で道内最高の成績を収めた袴田さんは「体の中を冷やして熱中症予防」朝日小学生新聞7月17日付)の記事を取り上げた。祖父が熱中症になり、自身も熱中症になりかけて怖かった経験の記事と結びつけた。そして「だれでも熱中症になる可能性がある。熱中症記事をもとめるのではなく、思ったことを書くように」と指導を受け「3、4回書き直しました」と応募作について話す袴田さん



にかぎらず、何事も自分だけは大丈夫だと考えてはいけない」と思うようになったことを伝えた。記事には、凍らせたスポーツ飲料をシャーベット状にし、活動する前に飲むな

情報活用能力向上図ろう 札幌 アドバイザー集い研修会



オンラインを含め全道のアドバイザーが参加した研修会

ど「知っている熱中症予防と違う方法が載っていてびっくりしました」。コンクールに応募した後は「おもしろい」と感じる新聞に目を留めるように。高齢者が音楽に触れると、物志れの進行を遅らせる可能性があるという記事を「お年寄りの人たちが役立ててくれたら」と願う。科学関係の記事を読みたいと話す。円山アカデミーは夏休み期間に作文講座を設け「新聞コンクール」への応募作

を指導している。中学受験に作文が出題されるなど、大学入試を含め最近の受験は、表現する能力が測られる方向に向かっているという。塾長の西田研太さん(42)は「教科の勉強ができる生徒でも、常識を知らないことも多い。日常生活について書かれている新聞を読み、大人と話することは、教科の勉強を日常生活でどう活用するかを考える機会になる」とコンクールを評価している。

2025年度のNIE全道アドバイザー研修会が1月17日、札幌市中央区の北海道新聞社で開かれ、各地のアドバイザーが活動の現状を報告し、今後のNIE活動のあり方などを語り合った。北海道NIE推進協議会の主催でアドバイザーや協

議会関係者らオンラインを含め約20人が参加。各アドバイザーから授業での実践や昨夏のNIE全国大会の報告が寄せられた。札幌国際大の朝倉一民教授は全国大会や、生成AIパイロット校である鹿児島県の小学校で行った出前授業などを踏まえ「新聞を讀

む力は大切。メディアリテラシーは体系化して指導していく必要がある」と話した。他のアドバイザーからは、次期学習指導要領の論点整理で情報活用能力の向上が取り上げられていることを受け「小学校」の「情報の領域」(仮称)などで今のうちからNIE実践を広げていかなければ、新聞学習が下火になる可能性がある」との指摘もあった。このほか「NIE活動を学校や他の教師に広げる最初の一步で良い方法は」との問いもあった。協議会の高辻清敏顧問は「個人研究での振り返りなどの成果を、ぜひ学校でも広めて欲しい」と講評した。上村尚生コーディネーターは「SNS時代のNIE実践と保護者対応」のテーマで話題提供をしたほか、26年夏の北海道セミナーには、日本新聞協会の関口修司コーディネーターを招く予定などを報告した。

昨秋から3地区でセミナー

全道各地でNIEに取り組み教員らが、授業公開や実践発表を通じて学び合う2025年度の地区セミナー(北海道NIE推進協議会など主催)は渡島(函館市)、札幌(札幌市)の両地区に続いて、9月に十勝(帯広市)、10月に日胆(新ひだか町)、11月には上川・旭川(旭川市)の3地区で開かれた。8月には札幌市で北海道セミナーも開かれ、25年度は計6回のセミナーを行った。

大谷選手の本塁打 一次関数使用予想 十勝地区



「実社会とのかかわりを意識した新聞教育『デジタルとリアルをつなげる授業づくり』を研究主題に掲げた第24回十勝地区セミナーは9月18日、帯広市立西陵中学校で開かれ、新聞記事を使って一次関数を学ぶ2年生数学科の授業が公開されたII写真II。

「米大リーグ・ドジャースの大谷翔平選手が今季、何本のホームランを打つか

を予想し説明しよう」と、同校の山崎風也教諭が課題を設定。大谷選手が2年連続で50号を放ったことを伝

自分たちの生活と 政治の関わり学ぶ 日胆地区

日高管内新ひだか町の三石中では、第19回日胆地区セミナーが10月17日に開かれた。近隣から参加した教員ら約20人が、新聞記事を教材にした3年生社会科「国の政治の仕組み」の授業を見学して実践事例を学んだII写真II。



日高NIE研究会と北海道NIE推進協議会の共催。三石中の川上知子教諭は、衆議院と参議院がある国会の仕組みなどを説明。続いて生徒たちは、自転車走行中に携帯電話を使う「ながら運転」に反則金を課す改正道路交通法や2025年度予算成立といった記事を読みながら、自分たちの生活にどう影響するかなどを議論した。

を予想し説明しよう」と、同校の山崎風也教諭が課題を設定。大谷選手が2年連続で50号を放ったことを伝

えたこの日の新聞紙面を見た。これを受けて生徒たちは、記事データベースを使って例年の本塁打数や残りの試合数などを調べてグラフを作り、ホームラン数の記録を予想した。

授業後に行われた研究協議では、参加した教員からは「情報が多すぎて検索の段階で止まり、グラフ作成まで行かない生徒が多かった」「調べたい情報の具体例を出してあげると良かったのでは」といった指摘があった。

インド経済の発展 地理の授業で探究 上川地区



見を交換。「要約したものではなく、記事そのものに触れさせる経験は大切」時間がかかるため、事前に新聞を読み込ませて良いものでは「などの声が上がった。

は11月20日、北海道新聞旭川支社を本部にオンラインで開かれ、教育関係者と旭川市立大の教職課程の学生ら合わせて約30人が参加したII写真II。

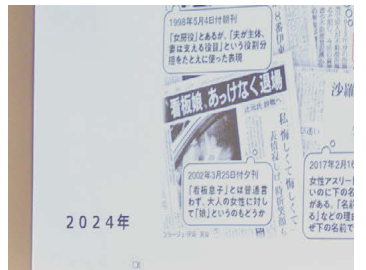
セミナーでは、上川管内美瑛町立美瑛中の梶田貴裕教諭が事前収録の映像を通じて、インドの経済発展に関する1年生社会科地理的分野の授業を公開。同国に進出した日本企業を紹介した記事などを使いながら、人口が多く英語も公用語のため、外国企業の投資が盛んな実態などを説明した。

富良野市立樹海学校の佐藤一博教諭は「義務教育学校3年目のNIE活動」と題し、児童生徒が選んだ記事について感想や意見をワークシートに書く朝活動などについて報告した。

その後、2グループに分かれて行った研究討議では参加者から「新聞を身近に感じる生徒が少なく、関心を持たせる工夫が必要」などの意見が出ていた。

ジェンダー平等 活動内容を説明

朝日・小沢支社長 道研究会で講演



北海道NIE研究会(菅原隆司会長)の冬季研修会が1月9日、札幌市中央区の北海道新聞社で開かれ、道内の教員やマスコミ関係者らオンラインを含む約40人が学びを深めた。

同会と北海道NIE推進協議会(菊池安吉会長)が共催した。朝日新聞社の小沢香北海道支社長が「語りつぐ戦争とジェンダー」と題し「ジェンダー平等宣言」など同社の活動を説明した。

「ひと」欄で取り上げる女性の比率を増やしたことや、2024年には編集局



「語りつぐ戦争とジェンダー」と題して講演した朝日新聞社の小沢香北海道支社長

有志が執筆者となり、社内の「ジェンダーガイド」を改定したことを紹介。北海道でジェンダー平等を目指すため、25年12月に産官学で立ち上げた「ジェンダーコレクティブ北海道」についても触れた。

また、読者から寄せられた戦争体験投稿をまとめた朝日新聞のサイト「声語りつぐ戦争」を活用した芽室西中の授業も紹介した。引き続き、昨年9月に札幌市立あいの里東中で本家陽業教諭が行った授業「情報収集の達人になろう」の映像を視聴し、出席者が研究討議を行った。

後半では本年度の実践指定制校2校が報告を行った。札幌市立緑丘小の高橋周教諭は、生成AIを活用した道徳の授業について発表。北広島市立西部中の野田朝日那教諭は、生徒の作文を新聞に投稿するなど、日々の新聞活用授業とその成果を話した。

NIE実践奮闘記

礼文町立礼文小教諭 加藤 育海

中休み。「今日の新聞はまだ？」と、子どもたちが教室の新聞コーナーをのぞき込んでたずねてきます。離島の礼文島に届く新聞は本島からフェリーに揺られ、昼前や正午過ぎに届く「午後の朝刊」。時化で欠航すれば翌日、翌々日までお預け。そんな物理的な制約さえも、ここでは日常の一部分です。



私がNIEに本腰を入れたのは、ある危機感からでした。NIEのイメージについて、個人的には単発の「ぶつ切り」の取り組みが目立ち、学習指導要領が求める「教科横断的な資質・能力の育成」という本質まで届いていないと感じていました。

さらに、昨今の「オール」

ドメディア」への偏った解釈によって、保護者層にも「新聞を学習に取り入れるのはもう古いのではないのか」「果たして学習効果はあるのか」などの懐疑的な見方が広がっていました。

「新聞にはいろんな記事が載っている」「同じ日でも何回でも見返すことができます。この過程で感覚的な「面白い」が、論理的な裏付けを持った「説得力のある意見」へと昇華されていきました。

同時に、読書力診断検査の結果で見えた「文法力」と「論理的考察力」の課題解決のため、新聞ワークシートを導入しました。A3判両面印刷で毎週配布し、土日に親子で取り組むよう呼びかけました。

これを繰り返すうちに廊下の掲示板には成長の足跡が並び、懇談会では「親子の会話が増えた」「語彙力を増やそうという取り組みを家で始めた」という声が届くようになりました。家庭と一体となった「学びのサイクル」が回り始めた瞬間でした。

「午後の朝刊」広がる世界／毎週ワークシート配布

も各紙で伝えたい記事やメッセージが違うなど、児童たちが気付いた記事の多面性をSNSで紹介し、他学年の児童から返ってくる反応をもとに話し合う。あるいは「ロイロノート」を使い、記事の魅力を動画を通じて上級生や下級生に伝えます。

表面には幾つかの記事を選んで貼り、「事実は何か」を精読します。裏面では一つの記事について、記者の考えや思いをピックアップさせて「自分ならこの記事をどう考えるか。賛成か反対か」などの発問を設定し、400字詰めマス目に記述させます。

h2やポケモンカード転売問題という身近な題材を、社会科解説の「多角的な考察」や道徳科の「社会のきまり」の視点から話し合いました。既有的知識と最新の情報が結びつき、生きた知恵へと変わる光景は、まさに指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」

数という本校の限界は「地域に支えられた豊かな学び」という強みに転換できました。この潮風香る教室から、これからの新聞という「社会を映す鏡」を手に、未来を切り拓く資質・能力を育てる挑戦を続けていきたいと思えます。

愛知で第22回NIE学会 「新聞切り抜き」を報告

日本NIE学会第22回愛知大会が9月27日、名古屋市中名東区の愛知東邦大で開かれた。在住外国人数が多く、日本語教育が必要な児童生徒数が全国最多の愛知県で、外国にルーツを持つ子供向けに行ったNIE活動などが発表された。

中日新聞NIE事務局の岩下理花さんは、外国にルーツのある子供向けに、県内3市で行う新聞切り抜き作品づくりについて発表した。「花」「宇宙」などのテーマに沿って集めた記事を書き、見出しを付けて仕上げた。記事の選定や切り抜きは大人が担当する。

安城市の小学校では2018年から、外国ルーツの子供たちを対象に教員が行う切り抜き作品づくりの授業を支援している。読み書きが上手でない子供たちはコメントを記すのも大変。それでも地元グループに関する新聞は、コンクールで優秀賞に入ったという。岩下さんは「大人の支援を得て書き言葉を学ぶことは、学習言語を学ぶことにつながる」と手応えを語る。

知立市では同事務局が21年5月から、日本と外国ルーツの子向けに「新聞寺子屋」を企画した。学童保育の場で昨年9月までに36回開いて計50人が参加。学生や小中学校教員らの支援で切り抜き新聞を作る。新聞には豊富な写真もあり、支援者が漢字の読みや意味を説明。子供たちは自分のレベルに合わせて楽しめる。岩下さんは「勉強より交流という意識。もっとハードルを下げてNIEの新しいアプローチを模索したい」と話していた。

このほか、シンポジウムにはメディアアリテラシーの大切さを学ぶプログラム「レイのブログ」を開発した慶応大4年の今井善太郎さんが登壇。スマホやタブレットを使い、アニメや謎解きゲームを楽しみながら「児童生徒に情報の検証や批判的思考を学んでもらえる。ゲームならどんな国籍の子も楽しんで学べる」と普及に期待を寄せた。また、闇バイトの危険性を学ぶ「レイの失踪」を制作したことも紹介した。

一方、スマートニュースメディア研究所の長沢江美研究員は「プロがお金をかけて発信するマスメディアと、誰でも発信できるソーシャルメディアを子供たちは同様に見ている」と問題を訴えた。また、アルゴリズムの仕組みで似たような意見ばかり集まるフィルターバブルを破るためには「アルゴリズムで作られることが大事」と指摘した。

現場に近い情報の提供に寄与

日本経済新聞社札幌支社編集部長

四方 弘志

高校生の金融リテラシー



現場に近い金融機関の人材を出前授業に派遣する取り組みも広がっている

高等学校で金融経済教育の必修化が始まって4年がたち、生徒が関心をもつような授業に向けた様々なツールが活用されている。たとえば「株式学習ゲーム」。数人単位で生徒がチームを組み、仮想所持金をもち、議論しながら東京証券取引所の上場銘柄をウェブ上で模擬売買をするものだ。これを2年生の家庭基礎の授業に使っているのが札幌南高。NIEアドバイザーで主幹教諭の志田淳哉さんが、授業を受けた生徒に感想を聞いたところ「負けて失うこともあったが、どきどきわくわくして楽しかった」など好意的な意見がいくつも上がった。

一方で「実感が伴わず、どうしても勘で買ってしまう」などの課題を口にする生徒もいたという。生徒の皆さんが議論の中で、解決策として上がった一つは「学校以外から専門家の講演を受けて実際の知識を得ながらゲームに臨むのがいい」だった。

金融経済教育で学ぶべきなのは、もちろん投資ノウハウではなく、金融商品の特性や損をした場合のリスク、トラブル回避などの金融リテラシーだ。ただ、そのきつかけとして、外部の専門家と接することで生徒の関心が広がり深まるケースも少なくないように思える。講師派遣を行っている

にはまだ限界がある。25年5月に北海道金融広報委員会の下部組織として北海道金融経済教育推進協議会が立ち上がり、各金融機関の従業員を養成して講師として派遣する窓口となる。事務局によると教材はJ・F・L・E・Cの標準講義資料を使い、中立公正な講義を行うという。

金融取引や資産運用の現場を知る講師による授業のニーズとそれをマッチングする動きは今後も広がっていくとみられる。一方、新聞報道に携わる立場としては、金融の正しい情報をできるだけわかりやすく紙面で伝え、教育の現場が金融の現場に記事を通じて触れられるような役割を果たすことがより必要になるだろう。

米国のトランプ大統領の発言で日経平均株価が上昇したり、高市早苗首相の発言で長期金利が上がったりする新聞報道で、生徒が株価や金利が上下する理由に興味を抱くきっかけになるかもしれない。

資産形成を巡る金融商品の種類と長短所、経済活動との関係性、ローンやクレジットを使う場合の留意点、金融詐欺などトラブルの実態について、正確で具体的なケースを取り上げる記事が金融リテラシーを高める「ツール」になれば新聞の存在意義も高まる。そんな記事を増やせるよう取り組んでいきたい。



北洋銀行では、出前授業を導入した学校が翌年度以降も希望する「リピーター」が目立つという。授業への講師派遣は2024年に発足した金融経済教育推進機構(J・F・L・E・C)が知られる。学校側が受け入れられるよう一定の中立性を満たす「認定アドバイザー」の資格を得た講師が所定の教材を使用して実施する。J・F・L・E・Cと連携して道内の学校に講師派遣を行っている北海道金融広報委員会によると、高校への派遣実績はJ・F・L・E・Cが発足した24年度には前年度の2倍以上の18校に増え、25年度も今年1月時点でほぼ同水準だという。

現場に近い金融機関の人材を派遣する取り組みも広がっている。講師は特定の金融機関に所属しない人が認定対象。道内に必ずしも多くなく、道内全域のニーズに

第10回大学のNIEを考える会(北海道NIE推進協議会主催)が2月24日、札幌市中央区の北海道新聞社で開かれたII写真II。北星学園大の阪井宏教授が座長を務める同会では2016年から、道内の大学教員やメディア関係者が大学のNIE実践について意見を交わしており、この日は2人が話題提供した。

札幌大の兼間昌智講師は新聞の社説を使ったリポート作成授業について発表した。学生たちは、大学図書館のデータベースを使い興味を持った社説を要約。人工知能(AI)の回答も一部参考にしながら、これに対する意見文を作成した。授業後、学生に行ったアンケートでは新聞を使って意見文を書くことについて9割以上の学生が「有効であった」と答えた。兼間講師は「批判的思考に基づいて解決策を考えることは、

リポートのブラッシュアップにつながる」と話した。北翔短大の菊地達夫教授は、学校図書館の司書教諭課程の学生向けに行った実践を報告。絵本「おぼけのメール」シリーズを紹介した記事を基に、物語に登場した札幌などの施設を調べた授業を行った。記事のほか絵本やインターネットと複数の情報に触れることで、学生たちは媒体により伝え方や内容が異なることを実感したと振り返った。会場からは「AIの活用によりリポートの質は上がったが、考え抜くことの喜びを学生は感じているのだろうか」などの声が上がっていた。

社説や絵本を活用 大学での実践紹介 札幌で教員ら交流

第10回大学のNIEを考える会(北海道NIE推進協議会主催)が2月24日、札幌市中央区の北海道新聞社で開かれたII写真II。北星学園大の阪井宏教授が座長を務める同会では2016年から、道内の大学教員やメディア関係者が大学のNIE実践について意見を交わしており、この日は2人が話題提供した。



リポートのブラッシュアップにつながる」と話した。北翔短大の菊地達夫教授は、学校図書館の司書教諭課程の学生向けに行った実践を報告。絵本「おぼけのメール」シリーズを紹介した記事を基に、物語に登場した札幌などの施設を調べた授業を行った。記事のほか絵本やインターネットと複数の情報に触れることで、学生たちは媒体により伝え方や内容が異なることを実感したと振り返った。会場からは「AIの活用によりリポートの質は上がったが、考え抜くことの喜びを学生は感じているのだろうか」などの声が上がっていた。

編集後記

実践奮闘記を寄せていただいた加藤育海教諭には2022年9月、礼文小での宗谷地区セミナーで授業を公開していただいた。複式学級の3、4年生11人が、楽しい学校生活を送るには何が大切かを考える道徳の授業を見学予定だったが、台風の余波でフェリーは欠航。稚内からオンラインで視聴した。そんなことを思い返しながら「時化で欠航すれば翌日、翌々日までお預け」という一説を読み、新聞が届くのを楽しみに待っていてくれる人たちに改めて感謝したい気持ちになった。